

水を使うための装置—溜める・汲む・洗う

水道の蛇口が普及する以前からあった、水を使うために工夫された装置が、郡上八幡にはまだ生きています。

水源や場所、利用目的に応じた多様な水利用施設

上下水道のない時代に、水を使う施設の設置場所は、地形や取水の条件で決まりました。郡上八幡では、飲用などのための質の良い水を得るために、斜面地沿いでは山水や湧水をうける水舟が、また平地には地下水を汲み上げる井戸が掘されました。汚れを流す洗いものためには、川や用水沿いに豊富な流れを利用するセギや洗い場などがつくれました。使用後の水は、排水溝や用水・川を介して

吉田川に集まります。このような伝統的な水利用施設が130以上あり(p.25)、個人のものだけでなく共同でも利用し、多くの世帯が様々な目的で水が使えるような知恵にあふれています。上下水道が整備されたことで利用の目的は変化しましたが、現在多くの施設が使い続けられています。

水屋と水舟

二～三段に分かれた階段状の水槽を上段から水が流れ落ち、上流ほど良い水質を必要とする用途で使われるものを水舟、そこに屋根がかかるものを水屋と呼びます。原則、上段を飲み水、中段をすすぎ水、下段を洗い水に使っていましたが、現在は水舟ごとにルールを定めて、飲用、すすぎ、飲み物や果物などの冷却、花への水あげ、野菜などの泥落としなどの利用目的を段ごとに割り当てています。よい水質が必要な順に上流から使うことはかわりません。このように水舟は、

限られた水を多目的・段階的に有効利用するという仕組みをもち、そのためには水質を保つためのルールを共有することが大切です。山水をパイプで導水して利用する水舟は、山の斜面沿いの尾崎地区に集中し、多くが共同水屋です。宗祇水のように湧き水を水源とする湧水井も、水舟と同じ階段状の受け皿で使われ、斜面の端や川沿いに見られます。こうした山水または湧水を使うための伝統的な水舟利用の他に、最近では水道水や井戸水を使った水舟もみられます。



三段にわかれる水舟

冷やされるスイカと水あげされる枝もの

斜面沿いに位置する水屋

井戸

地下水を汲み上げて利用する井戸には、手押しや電動のポンプで使うもの、また敷地の内や道沿いに位置するものと、様々なタイプがあり、使い方がすこしづつ異なります。手押しポンプの井戸は、植物の水やりや防災のためのほか、道沿いに設置されている場合は打ち水や融雪に使います。また、水質検査をした上で飲用に利用しているところもあります。一方、電動ポンプをつけると水道水とほぼ同じように使えるため、家の中の必要な所へ引き込み、洗濯や風呂、床暖房などに利用しています。

個人利用と共同利用のものがあり、道沿いにある共同井戸は5～10

軒程度で使っています。北町では個人井戸が、南町の東側と山裾では共同井戸が多く見られます。またかつて使われていた井戸の跡が道の中央や狭い道端に見られ、これらは車の交通に邪魔になるため撤去されたと考えられますが、マンホールの下に井戸の地下部分が残っている場合もあります。上水道がない時代、井戸は飲水のために重要で数多く存在したと考えられます。近年の調査から、北町の個人敷地内に現役の井戸がまだ数多くあることが確認されましたが、井戸の全容はまだ把握しきれていません。



左京町の井戸端で遊ぶ子ども



井戸のあった跡



常盤町の共同井戸